

⑧ Medieval Researches, vol. II. p. 6.

⑨ 成吉思汗實錄序論第八頁。

⑩ 狩野博士還曆記念支那學論叢所載、拙稿「元朝の漢文明に對する態度」參照。(また本書所收別項)

⑪ 大元馬政記跋。

三 經世大典・元史・元典章の站赤に關する記事に就いて

元代の驛傳に關する研究に於て、元史兵志中に收められた站赤の一篇が從來極めて重要な史料として尊重せられたことはいふまでもない。元典章が印出せられ、容易に接手し得られるやうになつてからは、やゝその重要さを減じたけれども、然も典章の文句は極めて難解であるのみならず、兩者の記事を比較すると、互に出入するところがあつて、必ずしも一樣でないから、なほその史料としての價値は充分に認めらるべきであつた。然るにこれをこゝに影印せられる經世大典站赤門の記事と細かに比較して見ると、その一項として後者の記事以外に出づるものは無く、悉くその中から抄出したのに過ぎないことが認められる。此の如きは元史志類の性質上寧ろ當然のことで、今更怪しむにも當らないことであるが、たゞその撰擇抄録が甚だ無方針且つ不用意で、大典のそれぞれの記事の性質や價値に就いて、深くも輕重を考慮して成されたものとは思はれず、互に關聯した事實に就いても、一方を収録して他方を顧みなかつたり、或は抄出した事項の年月を誤つたり、或は原文の意味を誤解した點などもあるのを認むるに至つては、全く一驚を喫せざるを得ない次第である。こゝに一々その例證を列擧すべきではないが、著しい一例を擧げるならば、經世大典站赤門の記事は前述の通り、文宗の至順元年十一月にまで及んで居るのに、元史站赤